

工事よ、何處へ行く

世界が平和の状態に在ると、不和の状態に在るとに關せず、我等が一切の工事は停止する事の出来ないものである。今日我々の關係すべき土木建築工事を大別するならば、

第一が交通に關する工事

第二が動力に關する工事

第三が衛生に關する工事

第四が保安に關する工事

である。此等の工事が各種各様に連絡して今日の地球上に所謂人類の文化を具現してゐる。此丈けの大きな職分を負擔しなければならぬ我々工事關係は、一時的の社會事情の爲に、本來の研究的態度を忘れてはならぬ事勿論であるが、工事なるものが一ヶ所に、或は一種類に永久的に繼續せらるゝものでない爲に、從業が斷續であり、工事關係者が非研究的であると言ふ事は最も遺憾に堪えない事である。

實際今日の狀態にては、工事技術家をして永久に職業的不安を感じしめないと言ふわけには行かない、然し乍ら此不安あるが故に専門書を讀まず、専門雜誌一冊すら見ないと云ふに至つては、却つて益々自己の職業的自信を破壊するものであつて、斯くの如き現場人の工事は到底此社會を繁榮にするものではない。

工事關係の將來は斷じて悲觀すべき運命のものではない、恐るべきは各自の研究的努力の足らざる事である。

我々は先づ何よりも本年初頭に於て工事常識の養成と、工事研究の獎勵とを強調しなければならぬ。

それには設計者が工事現場を能く知る事である。而して工事現場を卑下する事なく常に之に親しむべきである。所謂勞働の神聖なる事は今更ら申すまでもないが、口に云ひ易くして實行の容易ならぬ事である。

最近の先覺的工事は此の傾向が著しく發達しつゝある。其實例は國內は勿論の事ながら本號殖民地號の一大偉觀たる、朝鮮總督府清津土木出張所の清津港修築工事の如きも、設計者自ら各工事現場の第一線に立ちて充實せる施工振りを發揮せるものである。

此等の傾向は北海道に於ても、臺灣に於ても益々發達しつゝあり、斯くて知識階級の現場進出と現場工事の自覺とは益々助長され、今後工事技術の實際的發達は括目すべきものと信ずる。

